

『アイヌ文化への招待——女性と口承文芸——』

藤井 貞和

の著述のテーマが浮かび上がる得がたい時間であった。

前著『ユーカラへの招待』（角書「アイヌの文学」、北の教養選書1、北海道出版企画センター、一九八〇）から二十年余をへての、このたびの『アイヌ文化への招待』である。前著は扉に「故八重九郎さんのためにこの本を」と刻み、大林太良氏の序文を配して成る。このたびの『アイヌ文化への招待』は「女性と口承文芸」と副題する。日本口承文芸学会の主要な一角に、アイヌ語アイヌ文化の研究領域（換言すればアイヌ文学領域）があり、萩中氏は当初から当学会のこの方向を牽引するメンバーである。『アイヌ文化への招待』は当学会との深い関わりのおかげで刊行されたと言って過言でなく（石井正己氏の尽力である）、そのことを念頭に置きながら、以下の評言を試みたい。

日本口承文芸学会の二〇〇五年度大会は同志社大学で行われ、第1会場での発表は若手の大学院生たち（東京芸術大学）や奥田統己氏につづき、萩中氏の研究発表「アイヌの下紐」である。下紐というのはいろいろ言い方があっても、ふだんは口にしない。大怪我を克服されたあとだったか、京都へ颯爽と登場しての氏の口頭発表であった。第1会場、第2会場、第3会場という分散状況であったから、だれもが聴かれるわけでないシステムというのは残念なことだ。特に言えば口承文学関係の発表は、のちに学術誌に掲載して終わりとするわけに行かないオーラリティーがあらう。研究者と言えども男性に聴かせにくい内容だという問題とはすこしちがって、萩中氏の口語を通して「女性と口承文芸」という今回の著述のテーマが浮かび上がる得がたい時間であった。

「ユーカラと女」は「口承文芸研究」五号の発表である（一九八二）。ユーカラをどう日本語にするかは、日本語生活者からの研究として決定的である。金田一京助は「女の紐を／胸高に緊めたる」「あそびの小紐を／えり元高くしめ」「おとめの胸紐を／高く緊めた」、萱野茂氏は「遊びの胸ひもを／上へ上げたそれらしい」、また鍋沢元藏筆録・扇谷昌泰脚注では「結びの胸紐を／結びつける／遊び紐を／高くした／遊び紐を／上へあげる」と（いずれも原文や出典をここでは省略するが）、夫のほかには手をふれさせないというヌマツ（胸紐）を、どう日本語へ訳してみせるか。萩中さんは映画の撮影を手伝っていたとき（一九六四年だという）、ミシンで大量生産したモウル（女衣。肌着である）を持っていて、女性たちに着てもらった。「粗末なものだったのに」（と萩中さんは書く）、フチ（おばあさま）たちはヌマツ（モウルの胸元を両側から結びあわせるようにつけ

てある細い紐)を見た途端、いつせいに声を上げ、「ヌマツポー」(ポは指小辞)と言いながら頬に押しあてる人、いとしげに撫でさする人、まるで恋人にでも出会ったようであった。当時の北海道人類学会にそのことは報告済みとのこと。女であれば誰もが経験する、少女から大人になろうとするときの不安と羞らい、その思いをアイヌの女性たちは胸紐に託したのではなかるうかと萩中氏は言う。

そこで氏は、「tampa ne pa この年ごろ／shinot numatpo 胸紐をもうあそび／ekiraye 襟元を気にするように／pakno ampe まで大人っぽくなった／pon menoko 少女」(原文 平賀サタモ)とする。洋服とちがつて乱暴に手を動かすと襟元がゆるむ。胸元を気にして、いつか着物の襟をもてあそぶようになる。そのくせが年をとっても直らないのだと。そこで萩中さんはshinotを「もてあそぶ」とし、はだけた胸をあわせると襟元を上へ押し上げることになり、娘らしく胸元が引き締まるのであると解説する。金田一は若者たちがふざげかかかって胸に手

を入れるというように解説していた。微妙なちがいのようで萩中さんの場合は、ミシンでモウルを大量生産するところからはじまる、結論としての「もてあそび」という訳語であり、金田一の「ざれ、たわむれ」の説明とは男女が逆転する。今日の女性が第一ボタンの下ボタンをはずしたり留めたり、その意味性と変わらないこともしれない。

萩中さんの「ユーカラと女」は「これまでに、すぐれた先人たちも、男であったばかりに見落した女の部分を、私はこれからも拾って、こうと思つ」と締めくくる。「私たちの息づかいを伝える地名」は、ハルシナイ(春志内)を解説して、折詞のなかで mosir-kor-haru・haru-kakemat (国土の食料・食料の淑女)と呼べばヒエのことで、アワを夫にもつ食料の女王であると。トゥレフタウシナイ(うばゆり峠)に百合根を掘りにゆくときは二人以上連れ立ち、葉の数がすくなくないのは翌年以後に回して、むやみに花を折らない。開花の年に鱗茎が消えて実を結び、種子を散らしたあとに小さ

な鱗茎ができるのだという。葉とひげ根とを切り、土をよく落としてからサラニブ(袋)に入れる。そういうこまかいしぐさまでを彷彿とさせる「オオウバユリの鱗茎をいつも採取する沢」の名である。イヨンカウシペ(ヨンカシユツペ川)という名には onka (＝熟れさせる)を含む。百合根から澱粉をとり、澱粉滓(かす)はすだれの上で葉でおおい、熟成する(＝on)のに五日～十日ほどかかる。フチたちは様子を見に、何度も足を運び、頃合いを見ておおいをはずし、搗いてだんご状にして蓄え、料理に利用する。「私は地理(知里)に弱い」という萩中さんの冗談を急に思い出した。どうしてどうして、地名に関しては息づかいまで伝えるガイドである。

「コタンに生きた女たち」には「ユーカラからさぐる」と副題がある。結婚については先行研究もあるけれども、なかなかわかりにくい領域である。女の系統を表すといわれる下紐にはつよい規制がはたらき、見るのも聞くのもタブーである。その母系をたどることをはじめとして、女たちだけが

知ることであり、出産、祖霊祭から葬儀まで女性の領域である。たとい姑といえども嫁の死に装束を手伝うことは出来なかった。結婚規制の研究はひじょうに困難なことであるとあらためて思い知らされる。相妻はどちらが本妻でどちらがポンマツ（小妻）であるか、語り物のなかで明かされないことが多い。

ハヨクベ（装うもの）は武装するために用いられるが、神が人間の国を訪ねるとき、シマフクロウなどが変身するための衣にもなる。美しい女神が身につけて神々しい姿になる。「そのように装うこともある毅然としたアイヌの女の一面を知ってほしい」と萩中氏は結ぶ。ハヨクベについては『口承文芸研究』九号（一九八六）に「ユーカラにあらわれるハヨクベ」を發表されている。

本書は副題に「女性と口承文芸」とあるので、おもにそういう視野から一読者として読みすすめることにする。冒頭より「ユーカラへの招待」（前著『ユーカラへの招待』からその前半部を用例を省いて載せ

る）、『サコロベの世界』（『サコロベの世界』解説）、「八重九郎の伝承」（報告書の前文）、「アイヌの口承文芸オイナ」（『国立民族学博物館研究報告別冊』5）とたどると、かならずしも直接的に（女性）が主題化されているわけではないが、貫く女性のテーマや女性研究者としての萩中氏の方法にいたく納得させられるしかけである。サコロベ

は本来、男が語る。しかし八重九郎の周辺ではだんだん女性が語るようになり、はじめはあきれていた八重さんも、「男でやるものはいなくなつた」と言つて、語る女性の脇に座るようになったとか、それでもヘッチェ（かけ声）は入れないとか、美幌の女性の語り手を聞きにゆき、八重さんはヘッチェこそやらなかつたが、こぶしで膝を打つような様子にみえ、「いい声だもなあ」と、いたわりを込めて声をかけるなど、萩中さんの観察はつねに女性を視野にいれているように見える。

「サコロベは本来、人間の国を訪れてきてくれた神に聞かせるものだったのでなかろうか。だから八重さんはうんと気分の

悪いときはサコロベを語らなかつた。また『萩中さんが何日に来るといつていたから、またサコロベを聞ききたがるだろう』と、その前の日は食事のおかずにも気を使って身を慎むのだという」と萩中氏は書く（六七ページ）。

酒つくりに参加できるのは女性たちだけである。「アイヌの酒つくり」によると、仕込みのときなどはフチだけで、若い女は参加できない。仕込んだシントコのそばには近づかない。よいお酒になるかどうかで一年の吉凶を占う。道具は神々のまつりに使う道具と同じように丁寧に扱われ、古びて使えなくなつても感謝の気持ちを持ちつづけ、捨てるときには一定の場所に収めるが、このときの祈詞は女もあげてよいことになっている。女が祈詞をあげられるのは、これらの道具を取るときと、イチャラバ（祖霊祭）のときくらいだといふ。女が一般には祈詞をあげられないといふのは気になるところだ。

忙しいからといって、女がしいたげられているというわけではないと、「樺太地方・

金谷フサさんの暮らしと食べもの」のなかで萩中さんは言う。旅人があれば、かならず主婦が食べものを提供しなければならぬし、ごご編みや保存食づくり、本格的な冬が来るまえの準備など、一年中しなければならぬことは山ほどある。男には男の役割があり、女には女の役割があるのであって、男尊女卑のようなことは観察されない。それぞれの役割を守って暮らしているのであると。

生涯の終わりについては男女に差別があるべくもないが、「アイヌ民族の家族と人の一生」に詳しい。イチャラパはまき散らす意で、供物を死者の名を呼びながらまき散らすのだという。先祖は父方だとレプンカムイ（沖の神）やキムンカムイ（山の神）など動物神が多く、母方はコタンコロカムイ（コタンの神）やフリー（想像上の巨鳥）など、鳥の神が多いという。八重九郎の母方の先祖はカッコカムイ（カッコウ神）だそうで、女には神にかかわる話をしてない彼が、珍しく自分から話した。母親を埋葬するときにカッコカムイの鳴き声が

したのだと。祖霊祭のときだけ女が祈詞をあげてよいといつても、ごく控えめにであり、火の神に祈り言葉をささげる。

本書のさいごのパートは「知里真志保と知里幸恵」である。「背中で語ることば——知里真志保と私——」「アイヌアナクネピリカ——知里真志保の残したノート——」「幸恵ノートに関する覚え書」など、ノートを守り抜いた萩中さんの苦勞話が控えめに語られる。知里真志保は自分のアイヌ研究を通して、アイヌの歴史のなかでアイヌアナクネピリカ（アイヌは美しい）と言いたかったのだと、萩中氏の言葉は控えめだとしてもまっすぐに届けられる。

全体像がわかりにくくなったのでさいごに一覧すると、Ⅰ「アイヌの叙事詩」、Ⅱ「アイヌの女性たち」、Ⅲ「アイヌの伝承文化」、そして「Ⅳ知里真志保と知里幸恵」で、初出一覧、萩中美枝書誌（石井正己・小川正人編）を付してなる。冒頭に石井氏の「この本のはじめに——アイヌ・女性・口承文芸——」を立てて、前著以来の歩みを中心に、一 アイヌの口承文芸の位

置、二 アイヌ文化と女性への視線、三

知里真志保からの出発、と簡潔にして要を押さえている。例によって柳田国男から書きはじめるのはいかにも石井氏らしいと言える。しかしながら民俗学が「民族」に向かうと、台湾、朝鮮、満州いずれの地方でも、大東亜（圏）民俗学と言われた一国民俗学の名において、ある種の植民地主義を装わざるを得なくなる。口承文学研究が民俗学の企てに対する、これもある種の抵抗だったのではないかということは、今日的にみて古びない課題であり、アイヌアナクネピリカは「同化に報いる一矢であり、彼の自己主張でもあった」（彼とは知里真志保）とする、萩中さんのことばにそれがいじみ出ている。本書を柳田からはじめるべきではなかったのではないか、というつよい疑問をさいごに呈して、書評（は苦言をどこかに言わねばならないので）を終えることとしたい。見返しに「本書関係北海道地図」を付す。

（二〇〇七年、本体三八〇〇円、三弥井書店）
（ふじい・さだかず／立正大学）